

天井

×

床

(百合)

あなたに触れられないことは分かっていた。それでも好きになつた。なつてしまつていた。あなたはきつと、止めてはくれないのだから、わたしがわたしを止めるしかないでしょう？

切り出されて、磨かれて、敷き詰められて、わたしは床になつた。それまでは名前もない不純物の混ざつたただの炭酸カルシウムでしかなかつたけれど、役割を与えられてわたしは床になつた。

踏みつけられる役割。重みを支えるだけの役割。それでも名のない頃に比べれば幾分か安らいだ。自分が何のために存在しているのか理解することは、精神を固着させるに役立つ。何物でもない頃と比べて、自分が何物であるかについて考える必要が無くなつたという点において非常に有意義である。

わたしが床であるということが、どれだけの意味を持つのか、おそらくわたしを床に用いてくれた建築家や大工には想像もつかないだろう。ある意味で、床として生まれたことがわたしの幸福であつたのだと思う。わたしは感謝している。祈ることさえある。わたしを生み出し

てくれたありとあらゆる偶然について思いをはせ、彼ら全てが幸福であるようにと運命や神や大いなる存在に對して祈る。そして今のわたしが支えているこの建物がいつまでも永久に堅牢であるようにと、かたくかたく願いを込める。

この建物は美術館らしかつた。休日にはたくさんの方が訪れてただ静かに作品を眺めていく。それ以外の日は閑散としていて、やはり静かだつた。

時々作品の入れ替えが行われて、そんなときだけわたしはその作品を眺める事が出来る。たくさんある現代彫刻や陶芸や金銀細工の影がわたしの膚の上に写つて鏡のように反射されるときだけ、わたしはその芸術品を眺めることができた。

彼らは概して高慢で鼻持ちならなかつたが、しかし美しかつた。芸術家たちに愛されて生まれ、美術愛好家に慈しまれて育ち、そしてあまたの一般人に賞賛の視線を浴びせられていた。わたしは彼らを本当に美しいと感じたが、同時にひどく遠いもののように感じていた。

鏡面のように丁寧に磨かれて、黒光りしているものの、わたしは踏みつけられる床でしかない。触れられずに遠

いところに飾っておかれる美術品とは違う。そのような諦観は、常にわたしの根幹にあった。

平素、彼らは垂直に壁にかけられ、台の上に載せられて、人々のために捧げられている。わたしからは知ることは出来ない。けれど彼らの喧しい自慢合戦はよく聞こえた。殆ど人の来ない平日の営業時間中に、それは行われていた。

今日も、現代彫刻たちが舌戦を繰り広げている。

——だあーから、俺の方が芸術的に優れているんだつーの。なんで俺の美しさが分かんねえんだよ。

——うっせーデブ。てめえなんか結局、ただの木工細工じゃねえか。小学生だつてそれぐらい出来らあ。アタイのソリッドな針金の荒々しさに勝るものなんざ居ねェんだよ！

——ふおっふおっふお。二人ともまだ青臭いのう。数百年の歴史をその身に刻み込んだ儂の落ち着きに比べればまだまだ。

——あらア、そんな古くさい土細工の鬼瓦サンがよく言うわねえ。あたくしのアクリル製流線型フォルムにかなうものなんていないのよん。

そんな美術品たちの醜い喧嘩をBGMのようにして聞きながら、わたしは身じろぎせず建物を支えている。

今日の口喧嘩はまだマシなほうで、時として居心地の悪さに身じろぎしたくなるほどの醜さに発展することがある。わたしはそれを時々止めたくなつて、何か言おうとして、それでも言葉を発するのを我慢する。ぎゅっと結晶格子を縮こまらせて、身のうちの思いを封じ込める。

もしも私が彼らを怒鳴りつけたら、間違いなく全員が不安がつて怯えるだろう。わたしは全てを支える土台だ。わたしがひとたび支えるのを止めればそれだけでこの建物は崩壊する。

わたしの役割は堅牢で丈夫な床だから、そんな風に皆を怖がらせることはしてはいけない。出来るだけ静かに、まるで存在しないかのように盤石でなければならぬ。そうでなければわたしの存在意義はない。

そうやってこの建物が壊れてしまうまで耐えて耐えて耐え抜くのがわたしがここに居る理由なのだから仕方がない。

それでも自分の中の嫌なところが、表層のマーブル模様になってぐるぐる渦巻いているのが分かる。黒い気持

ちが螺旋状に絡み合って、どんどん深い淵へ落ちていき  
そうな、そんな気がする。

気を紛らわせるために、わたしは意識を上方へ向ける。

美術品の置かれている回廊。その中心だけは吹き抜け  
状になっていて、自然光がガラス天井を通して入って  
くる休憩スペースになっている。

美術品たちは直射日光を嫌がるから、できるだけ回廊  
のひさしの奥に引っ込むようにしているけれど、わたし  
はこの澄んだ太陽の光が降りてくる場所が好きだった。

意識をその場所に集中させて出来るだけ陽の光を浴び  
るようにしていると、自分が一瞬だけ役割から解き放た  
れて、自然のままの大理石に戻れるようなそんな錯覚に  
陥る。

「……あなたは、どうなの？」

誰にもきつと聞こえないぐらいの小さな声で、遠くへ  
呼びかける。

ずっとずっと気になっていた。

誰からも感知されずに、その光を自らの身に通して運  
んでくれているその存在が、わたしと同じことを考えて  
いてくれればいいのにつて。

「……はへ？」

返ってきたのは思っていたよりずっと脳天気な声で、  
危うく吹き出すところだった。

「あなたよ、あなた。天井さん。ガラス製で透明で目に  
見えないあなた」

「お、気づいてくれてたんか」

少し戸惑ったような口調。でも嫌がっている様子でも  
ない。誰かと話すこと自体が珍しいのだろう。きつとわ  
たしと同じように。

「それはそうよ。だって、わたしたちが雨に濡れずにす  
むのはあなたのおかげなもの」

私がそう言うと、彼女は少し照れたように屈折率を歪  
ませた。

彼女が屈折率を変えると、光が揺れる。彼女を通して  
落ちてくる明るさを見て、わたしは何故だか海を思い出  
した。水面を通して揺らめく陽は金色をしていた。さざ  
めいている波の音まで感じられそうな気がした。

「なんやあ、褒められると、めっちゃこそばいわあ。あ  
りがと」

「……別に、お礼なんて。本当のことだもの」

素直にそんなことを言ってしまった自分に気が付いて、急に恥ずかしくなった。冷え切った自分の心がぽつと火が点いたみたいに暖まっていくのを感じて、戸惑う。

こんな風に感じた事なんて、今までなかった。誰かと話をするのが楽しいと感じることなんて。

と、彼女はふつと思いついたみたいに言った。

「せやったら、うちがここに居るのもあなたのおかげやね」

「え？」

とくと、自分の中の何かがうごめくを感じた。自分の感情のどこか、スイッチが入って歯車が動き出すような感じ。

「あんたがうちとか柱とか壁とかを支えといてくれるから、安心してこんな高いところ居れるんやと思う」

緩やかに、光が揺れる。彼女が緩く淡く、笑っているような、そんな気がした。

「いつも、おおきにー」

ちよつとふざけたみたいなの、でも、それがかえって暖かみを伝えてくれるような、そんな感じがして心地よい。

「そんな、お礼、とか……」

なんだか恥ずかしくて、話題を変えようと焦った。自分の記憶の中、一生懸命話したいことを探すけれど、ぐるぐる空回るばかりで何も出てこない。

ふと、さつきから思っていることを口にしてしまった。

「ねえ、その関西弁。なんかイントネーション不自然じゃない？」

「えへ、バレたか。ウチ、東北大学出身のハイテクガラスやねん。強度増し増しやあ」

彼女はそんなことを言って、微かに身を軋ませた。

「アレや、ちよつとアンタに親しみもってもらお、思てこんなキャラ設定にしてみましたー」

「自分でキャラとか言ってるの寒いんですけど」

本当は『そんなことしなくたって十分魅力的だと思うのに』って言いたかったのに、そんな素直な言葉にはならなくて、ついつい憎まれ口が出る。自分で自分がすごく馬鹿みたいに思えてきて、ますます上手い言葉が出なくなる。

「お、さすが大理石さんやな。底冷えがやつぱ違いますなあ」

そんな軽口を言いつつ、彼女の光はびたりと揺らぐの

を止めた。笑っていたのが真顔に戻ったような、そんな気がして、わたしは自分の底意地の悪さを後悔する。

「というか、ほんまに嫌やったら止めるけどー。どう？」

そんな風に、言われると、困る。

そんな風に、透明に、澄んだ声で、見えなくなるぐらいの透明度で、消えていってしまいそうな声で。

そんなことを言われるのは、困る。

「……いいわよ、別に」

わたしは、言いたいことの半分も言えないままで、ただ心にも無いようなことを伝えるだけだ。

「何だかそのしゃべり方、慣れちゃったし。今更標準語で話されても困惑するだけだわ」

「そかー。ほんなら安心したわ」

「……何がよ」

「これからも、うちとおしゃべりしてくれるつちゅーことやろ？ 友達が出来て、うち、ホンマにうれしいわ」

また光が柔らかく。彼女が確かに喜んでいるのを感じて、ひどく気持ちが悪く。自分の重みを、礎であることを忘れて、まるでただの炭酸カルシウムの一分子に戻ったみたいなの、そんな自由な気持ちになる。

「……うん」

わたしは、この気持ちをどう表したらいいのか分からなくて、ただ小さくそれだけ言った。

敷き詰められたタイルの隙間がきしきし音を立てるような気がして、わたしは頑張って結晶の振動を止めようとした。けれど冷え込んでいくはずの身体とはうらはらに、心の中はますます暖まっていって、そんな気がした。

それから、気が向けば彼女と話したいと思っている自分に気が付いた。あんまり話しかけて、うっとうしがられたらいけないと思って我慢しようとも思うのだけれど、それでもうまく止められない自分がいた。

「今日は良い天気なのに、お客さん誰もいないわね」

不自然なくらいに、浮き足立った口調の自分が、本当に馬鹿みたいで、客観的に考えて可哀想なくらいだとも思う。

本当はこのセリフだって、二人つきりで嬉しいわ、とか言いたかったはずなのに、どうしてこんな素っ気ない言葉に変わってしまったんだろう。やっぱり無機質な存在だと生々しい言葉が言えなくなってしまうんだろうか。

反対に彼女の方は、落ち着ききつていて、時々、わたしの気持ちに気づいているんだろうか、なんて憎たらしく感じることもさもある。

「せやなー。ま、みんな忙しいんやろな。人間はうちらみたいな居るだけで感謝されたりせえへんもん」

「そうかしら。わたしなんて、あなた以外から感謝されたことなんて一度もない。みんなわたしたちのことなんか、気づいてもいないんじゃない？」

「まあ、うちは特にガラスやし、見えへんから感謝も別にされんけど……うちはそれでええわ」

彼女がふうつと澄んだ声で言うのを聞いてみると、心の中のどこか大切なところが、きゆうつと締め付けられたような気持ちになる。

「うちを通して、お空とかお天道てんとさんが見えるやん？」

そしたら、なんかこの建物が無限に続いてる、そんな気がしますし、そいでお客さんとかが満足してくれたら、そいで十分やろ」

そんな素敵なことを言う彼女を、すごく眩しく感じる。自分の黒さ、卑屈さをひどく恥じ入ってしまう。

「……わたしは、時々、すごく嫌な気持ちになる」

自分の嫌な所ばかりが勝手に言葉になって出てくる心を、永遠に封じてしまいたくなる。何も感じることはない存在になればよかったのに。

「誰にも気づかれないでじつとうずくまってるだけだから、時々、誰かに気づいて欲しくなつて、暴れたくなつてしまいうわ」

「でもホントには暴れんのやろ？　せやったらすごい偉いやん。したいこと、みんなのために我慢してるんやから」

「……そうかしら」

心の中がぐうつと熱くなる。言つて欲しかったことを言つてくれて本当はすごく嬉しいのに、素直に言葉に出せなくて、ただ無愛想な相づちだけ打っている自分にひどく苛立つ。

「うん。あんたはホンマ偉いと思うわ。うちが保証する」

言うなり、きらりと光が落ちてきた。レンズの原理で集光して、わたしの上のひときわ黒い模様を明るく照らす。丸く輝いて、その部分だけがぼかぼか暖かくなる。

「……なに、これ」

「あんたに、光の勲章をあげる」

優しい声で、彼女は言った。

『よく我慢してるで賞』ってことやで。大事にしい」

自慢げに言う彼女がおかしくて、わたしは思わず声を立てて笑った。

「ふふ、ありがとう。でも触ることも出来ないわよ、光じゃ」

「せやなー、困ったなー」

笑みを含んだ声で、彼女も戯ける。

「アレや、普段はうちが大事に大事に預かってるから、いつでも見たくなったら取り出してあげるわ。声かけて」

そう言うなり、彼女はふつと光を消した。

気が付けば、ガラスの向こう側、僅かずつ雲が広がって太陽を遮っていた。

「雨？」

「うん、きつと」

抑えた声で言う彼女の感情が読み切れなくて、わたしはますます不安になってしまふ。

「嵐になるで、これ」

彼女の言う通りだった。

日が暮れてすぐに弾丸のような音を立てて、雨が降り始めた。ひどく打ち付けるような、重くて、その音を聞いているだけで痛みを感じるほどの猛烈な雨風。

「ねえ、」

話しかけても雨垂れの音がうるさすぎて、ちやんと届かない。声を思い切り張り上げることなんて出来ない。なりふり構わずに叫ぶことが出来れば良かったのに。彼女に縋ることが出来れば、もっと素直になれば良かったのに。

いつでもそうだ。どうせ無駄に終わるだろうと思うと、初めから頑張る気力が無くなってしまう。ただ踏みつけられるのが床だから、仕方のないことなんだと諦めて。そんな在り方で、今までこの建物を支えてきたんだ。

それでも、降りしきる雨に混じって彼女の声が聞こえた気がした。

「……かんにんな」

「え？」

「今、うち、いっぱいいっぱいやねん。氣い抜くと落っこちそうになる」



こちらの声が届いているとは思えなかった。

それでもこの暗い嵐の中で、強い風に揺らされながら、彼女はわたしを氣遣つてくれた。

「あんたに光、あげられんで、すまん」

その瞬間に、まばゆい閃光が走った。館内の全ての電気がふつりと絶えた。一拍おいてわたしさえも震わすほどの轟音が響く。

美術品たちが騒ぎ出す。

——呪いだ、災いだ、見たか、あの神々しい光を、閃光は俺たちを終わらせに来たんだ！ ああ神よ神よ、我らを見捨てたもうか、機械仕掛けのゼウス、ねじ巻き式のユピテル、電池とモーターの全知全能よ！

——嫌だ、こんなところで終わりたくない！ アタイはパリに行くんだ。ロンドンに、ニューヨークに、フィレンツェに、東京に！ 全世界を巡るまではこんなところでくたばるわけにはいかないのに！

——おお終わりだ一環の終わりだ！ このように闇が世界を覆うのであれば、儂はこんな歳まで老いさばらえるのではなかった！ さっさと碎けて死んでしまえば良かった！

——嫌あ、こんなの嫌よ、認めないわ、さっさと灯りをつけなさい！ そうでなかったらアタクシの美しい流線の身体に火を点けてやるんだから！

美術品たちが口々に叫ぶ。わたし自身、不安を叫びだしたかった。突如として全ての灯りがとぎれてしまうなんて、美術館が始まって以来の一大事だ。

けれど、彼女を信じるしかない。空間を隔てて向こう側に確かにいるはずの天井が崩れ落ちずに、耐えてくれるのを待つほかに。

彼女の為に、わたしができることを考える。

わたしは、一拍分だけ気持ちを集中させた。

そして、全力で叫ぶ。

「黙りなさいっ！」

びたりと、空気が止まった。

凍り付いたような雰囲気、一瞬だけ言葉が出なくなるようになる。それでも、勇気を振り絞る。

「うるたえても仕方がないでしょう。ただ待つしか無いんだから。そんな風にうるさくして、その振動でこの建物が崩れちゃったら元も子もないんだから」

美術品たちは、怖じ気づいたように黙り込んだ。

しいんと静まりかえった夜の闇の中で、わたしは雨に打たれる彼女のことを考えた。透明で澄んでいて、かすかに軋む身体で耐え抜いている、強い彼女がどうか、無事であるようにと。

こんな風にたった一人のために強く祈るのは、初めてだった。

「終わりだよ、もうじき」

彼女の声が、不意に聞こえて、わたしは意識を浮きさせた。いつの間にか考え込んでいたらしい。まだ電気はついていないけれど、確かに雨音はさつきよりずっとましになっている。

「ん……」

「雨漏り、ないよね？ みんな、大丈夫？」

「……ねえ、」

「ん？ どしたの？」

「口調元に戻ってる」

「ひゃう!？」

変な声でした。同時に軋む音がする。よっぱど動揺したらしい。わたしはちよつとおかしくって、笑った。

「わたし、そっちの方がいいと思うけどな」

「そ、そかなあ」

「うん、わたしはそっちの方が好き」

「ん……あんたがそう言うなら」

きしきし音がする。なんだかこつちまで落ち着かなくなつてしまつて、ちよつと黙る。

「あのね、」

彼女がおずおずと言った。わたしは意識をこの建物のつべんに向ける。彼女にしては珍しく小さく臆病な声を一生懸命聞き取ろうとする。

「あんたのこと、考えてたよ。ずっと」

その言葉を聞いた瞬間、心の芯のところがぎゅつと熱くなる。

「うん。わたしも」

そう言うので精一杯だった。それ以上なにか話そうとすると、ろくでもないことを言いそうで、こんな風に彼女が無事でいられたのだから、そんなことは言いたくなかった。

言葉じゃなくて、この気持ちを伝えられたらいいのに。言葉はいつも曖昧で、伝えようと思つたことが上手く

伝わらない。思ってもいないことばかり、発してしま  
う。

わたしたちには、指も手も無いから、彼女へ向けて何  
かを伸ばすことが出来ない。

絶対に触れ合うことなんて、出来ないんだ。

そんなことを考えると、敷き詰められたタイルの端が  
軋む気がして、ぎくりとする。

思いついてしまった。

たった一つ、わたしたちが触れ合える可能性について。

「どしたの？」

「ううん、何でもない」

わたしは彼女に嘘をついた。それがこんなに苦しくな  
るなんて、思いもしなかった。それでも次から次へと苦  
い気持ちがあふれ出して、こみ上げてくる。それを心の  
奥の方へ飲み下すだけで、精一杯だった。

わたしが望みさえすれば、きつといつでも触れること  
が出来るんだ。でもそれは、一度だけ。この建物が、世  
界が崩壊する最後の一瞬だけ。

この建物の全てを支えているのは、床なんだから。

翌朝、嵐の後の見事な晴天が広がっていた。はるか上  
空にある太陽がひどくまばゆくて、ちゃんと彼女のこと  
に気を配れない自分がいた。

こっちの気持ちがお留守なのをすぐに感づいて、彼女  
が声を掛けてくる。

「なんか元氣無いねー」

「……そんなこと、ないわ」

「嘘だあ。すごく静かだよ？ 昨日の大声が嘘みたい」

「ほ、ほら、あなたの声が聞きたくて、それでつい黙っ  
ちゃうの」

「ごまかすためにそんなことを言うと、今度は向こうが  
黙った。静けさの中、ひどくきまりが悪い。

「な、何よ」

「……らしくないよ」

「え？」

「そんなこと、いつつも言っただけじゃなく」

本気で戸惑っているような口調だった。

「あんたららしくない。何か隠してるの？」

「っ、」

どうしてだろう、見抜かれたのに、なんだか心の奥が

じわって暖かくなる。水道管が埋め込まれてるわけでもないし、床暖房があるわけでもないのに、次から次へとあふれ出てくる思いが言葉にならなくて、行き先を失って迷っている。

さわりたい、さわりたい。

あなたに触れることさえ出来れば、こんなに苦しなくて済むのに。

「……なんでも、ないから」

「でも、」

「いいからっ、本当に、なんでも、ない、の……」

言葉が、重くなる。何も言えなくなってしまう。何を言おうとしても、違う言葉になってしまいうそで。わたしの黒い気持ちを彼女に打ち明けることなんて、絶対に出来ない。

だって、光の勲章をくれたのは、彼女だから。

暴れ出さずに頑張るわたしを、褒めてくれたんだ。その期待を裏切るわけには絶対に行かないんだ。

だから、わたしにはもう、静かに黒い床として、黙りこくっているしかない。

「もう、しようがないな」

光が、降りてくる。暖かな、強い、まばゆい光。

「あったかいでしょ。肩こりに効くって」

「……肩こり？」

「いや、えーと、比喩的な意味で」

何を言っているんだかよく分からなかったけれど、慰めようとしてくれてるのは分かった。

「……ありがとう」

それだけ言った。

意識を無理矢理自分の中へ向けても、彼女の光がちらちらとわたしの表層をなせていくのが確かに分かった。

それは微かにこそばゆくて、幸せな心地がした。

自分の中の、太古の記憶を掘り下げていくと、最後には海にたどり着く。

床になる前。床材になる前。掘り出される前。地下深くの高温高压で大理石になるよりもずっとずっと前。炭酸カルシウムとして存在し始めた根源にまで深く潜っていく。一番最初の記憶は、ゆらゆらと揺らめく南国の光だった。

わたしは、海の底に沈んでいた貝だった。そのことを

思い出す。温い水のまとわりつく浅い海底の中で、微睡むようにして口を閉じていたことを思い出す。今はもういない種類の貝が死んで、いくつも集って、珊瑚やそのほかの生き物と一緒に堆積して集まって行くまでの、長い長い記憶の集まりを思い返す。

その間ずっと、透明な海の水を通して、光は照らしていてくれたんだ。南国の強い日差しが、澄んだ海水を通して柔らかく揺らぐ。そのたおやかさ、優しさがすぐく好きだったのを思い出す。

不意に、彼女の光に触れなくなつて、わたしは意識を浮上させた。

出来るだけ誰にも聞こえないように、呟いた。

「さわり、たいな」

言葉にすると、ほんのそれだけのことだった。たったそれだけのことで済んでしまうのが少しだけ切ない気がした。

「なあんだ、そんなこと」

彼女の声があった。

しまった。聞こえていた。

結晶格子の全てが動きを止めたような気がした。原子の震動一つ一つが厳かに運動を緩めて、彼女の次の言葉を待っている。とくん、とくんとゼロ点震動だけがうずくまるように呼応して震えていた。

「でも、出来ないわ。この建物を崩さない限り、わたしがあなたに触ることなんて出来ないじゃない」

彼女が何か言ってくれるのが待ちきれなくて、自分から告白した。

諦めたかった。逃げたかった。叫びたいのに、叫ぶことさえ出来ない。想いは言葉にはならなくて、胸の中でわだかまるばかりで。

それでも、わたしの考えていることなど、お見通しの風で、彼女は言った。

「あなたが考えてるより簡単な方法があるよ。ちよつと待つて」

きらめく光が、ひどく不吉に感じられた。それは海よりも強い輝き。まるで全てをなぎ払うレーザーのような、強度の高い不敵な光だった。

「あなたにやら、全部あげる」

彼女は笑って言った。

「何も、あんただけが苦しまなくて、いいんだ」

その言葉が終わった瞬間に、大きな音を立てて、ガラスが砕けた。降ってくるそれをまるでスローモーションのように感じた。

わたしは、何も言えなかった。ただその輝いているのがあまりにも綺麗で、こんな時だというのにうっとりとして見とれてしまっていた。

破片の切り口の一つ一つが光を浴びていて、確かにその鋭利な傷口は痛みを帯びているのに、何故だかそれを綺麗だと感じた。彼女の中に秘められていた多くの光が全部この瞬間に放たれたみたいに感じた。

てん、てんと白黒のサッカーボールが回廊の奥に転がって消えていった。正装もせずに舞踏会に入ってきた間抜けな従者みたいに見えた。

「聞こえる？」

ノイズが混じったような声。粉々になった彼女から、確かに聞こえる。

「んっ……」

言葉が詰まって、何も出てこない。ただ、必死で、それだけ答えた。

「感じる？」

「うんっ、うんっ！」

ただもう、触れているんだ、そう思うだけで、言葉も何も、出てこなくなる。

わたしの上に、砕けた彼女が覆い被さっている。ただその事実だけでどんな言葉も要らなかった。

軽やかな彼女の破片が全て、わたしの上にあって、わたしの黒い膚の上に、彼女がとどころ突き刺さって傷を残していてくれる。きつと、この傷は癒えないのだろう。そのことがひどく誇らしかった。

美術館の管理人があわてて駆けつけてくるまで、わたしたちはずっとそのまま寄り添っていた。わたしたちは無機物で、互いの温もりなどあるわけもないのに、そうして触れ合っている心地よさ、日の光の暖かさそのままの温度を確かに感じていた。

この美術館の中では、人間ばかりが静かだった。

無言の掃除夫たちによって肅々と彼女だったものは箒で掃かれ、掃除機で吸い取られて消えていった。いつも

より丁寧に膚の上をモップで撫でられ、彼女の残してくれた傷跡は摩耗して丸くなった。

破れた天井はぽっかりと穴が空いたようで、申し訳程度にベニヤ板でふさがれていた。それでもあきらかに小さすぎるその隙間から、やたらに眩しいばかりの光が直接差し込んできた。その光は揺らぐがずにまっすぐに照らしていて、わたしの心に虚しさだけを残した。

回廊へ通じる扉は閉じられ、美術品たちのおしゃべりも聞こえなくなった。わたしは本当に独りになった。ただ心を深い記憶の海へ沈めて、時間をやり過ごした。

海の記憶、揺らいで優しい光の記憶。暖かな流れの記憶、集光された勲章の記憶。わたしにはたった一度だけの愛された記憶がある。それだけでもう、十分な気がした。

と。

わあわあと誰か騒いでいるような気配がして、わたしは二度と向けるまいと思っていた意識を、上方の穴へ向けて飛ばした。

「いやー、おっさん、そこ触らないですよ、やあ、えっち、

ばかあつ、そんなしたら指紋が付くじゃんか！」

灰色のツナギを着た作業員に支えられて、何かが騒いでいる。透明で、脳天気で、少しだけ脆さを抱えた彼女の声が響いてくる。

「なん、で……」

「ガラスは消耗品だからねえ」

二人がかりで持ち上げられ、自慢げに彼女は光を反射させていた。まるで、お姫様みたいに見えた。

「それに一人きりで置いてけないもん。あんたみたいに綺麗な床、雨ざらしにしたら大変だし」

不格好なベニヤが外されて、開いていた穴にすっぽりとはめ込まれる。

「えへ。たがいま」

そうして彼女はやはり、照れたように屈折率を歪ませる。

「どうして、そんな」

まるで何も無かったみたいに。

「いやもう大手術だったよ。熱い熱いつぼの中でぐつぐつ煮られてホントいい湯加減ていうか」

光。柔らかに屈曲してたゆたう波。生まれた頃から、

ずっと傍に寄り添っていたような気がする。

「これからも、よろしく」

彼女の声が、静かにわたしの上に降りている。柔らかな光と共に。